



## 初めてお産を見る

日方圭子

英国・サリー大学助産課程学生(ダイレクトエントリーコース)

### 初めての分娩室実習

コミュニティでの仕事は楽しかったけれど、やはりお産を見るまでは助産が自分に合っているのか確信できなかったの、早いうちにお産を見て安心しておきたかった。だから3月になって分娩室で実習する日を何日かとった。

メンターのメルがスタッフトレーニングの業務も兼任していてなかなかスケジュールが合わないの、今後メルと働けないときはマンディがついてくれることになった。マンディは私より小柄なカーリーヘアがかわいいちゃきちゃきした感じの人(55巻7号87ページの写真でメルの横にいる)。メンターを快く引き受けてくれたはずなのに、なんだか初日は不安そうに見えた。聞くと「1年生にはできるだけ自然分娩を体験できるようにしたいんだけど、私が最近ケアしたケースは高い確率で緊急帝王切開になっちゃっているから、今日も心配」。

マンディの不安が的中して、その日私たちは緊急帝王切開を2件体験することになった。彼女のせいじゃないのに、マンディはとっても申し訳なさそうだった。「手術室の女王」の汚名を返上したいのに、最近不調なんだそうだ。初めての帝王切開見学は決して心地よいものではなかったけれど、気持ち悪くなったり失神することもなかったの、で安心した。2度目になると自分のいるべき場所もわかってきて、妊婦さんの枕もとで何が起きているのか、私の分かる範囲で実況中継したりしていた。

### メルとの初仕事

今度こそ正常分娩が見られるように、引継ぎで、6人目を妊娠中の経産婦を選んだ。自然破水から3日後の昨日行なった誘発が効かなかったの、今日再度入院して誘発することになっている。それなのにこのカップルは今朝電話でなかなかつかまらず、スタッフは焦っていて、「少々問題あり」という印象をもっていた。

カップルに対して少し偏見を持ちつつ、そしてメルと働くのが初めてなので多少緊張しつつ分娩室に入った。妻のほうは絶えず口悪く、ときに冗談交じりに今までの出産で経験したことのない誘発剤に伴う痛みに対して不平を言いながらも、痛み止めはガスだけでよくがんばったし、口数の少ないマレーシア系の夫のほうは妻のかなり難しい要求によく答えて、ずっと妻をハグして支えていた。

女の子が生まれるまでのあいだ6時間くらい、このカップルと付き合った。この時間があつたから2人を知ることができたし、その分満足感に繋がったのだと思う。この午後の勤務の間に、私もメルも2人をとっても好きになっていた。初めて見た正常分娩がこのカップルで、このお産でよかった、と思った。それにメルの、女性とパートナーへの接し方がとてもプロフェッショナルで尊敬したし、この人がメンターでうれしかった。

## 産前学級

この月にコミュニティミッドワイフによる産前学級に参加した。地域の妊娠 30 週以降の初妊婦を対象に日中 3 回(主に妊婦自身)、夕方 1 回(カップルで参加)と産科棟見学の計 5 回ある。産前学級は母親同士のネットワーク作り、それに病院での実際のサービスのことが分かっていい。産科棟付属の物理療法士が呼吸法、姿勢、リラクセス法を指導する時間もある。

この教室以外に NCT(National Childbirth Trust)という NPO が開いている教室も人気があるので、何度か見学してみた。こちらは仕事を休まずにカップルで参加できるように夕方開かれる。一般に開かれた助産婦による産前教室と違って有料な分、情報がもっと欲しい意欲的なカップルばかりが集まっているという感じがした。自然分娩中心の内容も充実していて、参加者の満足度も大きいようだった。

ただ、参加者の中で助産婦による産前教室に行っている人がほとんどいなかったのと、助産婦に会ったことのない人もいたので、実際の病院でのサービスのことも知っておかないと NCT クラスと出産当日のギャップがあつて困るだろうなと思った。

## ボーンマスで、ターナーさんと星さんに会う

NHS(National Health Service)のことを奨学金の出所+実習先くらいにしか意識していなかったから、実習が始まって、私たち学生も NHS の一員であることを認識して戸惑った。大組織の一員だし、直接政治も絡んでいる。それに毎日のように医療ミスやスタッフの不祥事のニュースが流れている。1 日でもいいから「NHS はこんなにすごい」ってニュースを聞きたいよね、そしたら気分も明るくなるのに、と何度シャメリーと話しただろう。

もちろん実習は楽しんでいた。でも、毎日の現実と日常の中で、気づかないうちに NHS 方式に染まっていつている。そんなときには私の

影のメンター、ボーンマス在住の日本人助産婦、ターナー節子さんと星裕美さんと話すのがすごくよく効く。2 人と話していると、助産婦になりたいと思った最初のきっかけや自分の理想にふっと戻されてはっとする。そして実習先であったこと、疑問に感じた実習中に質問できなかったことでまだ引きずっていることを聞いてみる。日本語で話せるというだけで違うし、2 人の声を聞くと、とっても元気になれる。

電話だけでは物足りなくなつて、ある週末にボーンマスへお邪魔した。海辺の空気を吸いながら散歩して、3 人で夜中まで語り合うと、翌週からまた新鮮な気持ちで実習に向かえた。

## 自宅出産希望者宅へ訪問

コミュニティミッドワイフは、自宅出産希望のカップルを妊娠後期に自宅訪問することになっている。自宅出産というと女性中心の自然なお産をしたいと願っている中流のカップルというイメージをもっていたのに、行ってみると違った。低所得者層の住む一角のアパートで、室内犬がいるせいかかなり汚れた印象だったので、「ここで出産するの?」と、私は入ったとたん不安になった。

妻は前夫との間に 16 歳から 5 歳まで 3 人の子どもがいる 40 代前半。「どの妊娠も問題なかったし、出産は早く進んで病院へ行くのにやっと間に合ったくらいだし、留守をしている子どものこともあるので入院はしたくない。だから今回はわざわざ病院まで行くのをやめて家で産みたい」との願い。彼女にとっては最後、夫にとっては初めての子どもだから、特別なことにしたいという思いもあるとのこと。

人はこんな理由で自宅出産を選んだ、と話を聞きながら自分の先入観に気づかされた。妊娠が彼女の日常の一部であるように、出産もその延長なのだから、大きな信念やきれいなイメージがなくても自宅出産をしたい人はいるんだ、とうれしいことを発見した訪問だった。